ベネディクト・アンダーソン
『比較の亡霊
――ナショナリズム・東南アジア・世界』

糟谷啓介ほか（訳），作品社，2005

Benedict Anderson. 1998. *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia and the World*. London and New York: Verso.

アンダーソンの知的営為

ベネディクト・アンダーソンは，東南アジア研究，ナショナリズム研究で世界的に知名度の高い学者である。ナショナリズムを研究する人，あるいは，少しでもナショナリズムに関心がある人であれば，彼の『想像の共同体』（*Imagined Communities*）は必読文献である。国民（ネーション）という想像の産物がどのようにして生まれ，国民国家（ネーション・ステート）がいかにしてグローバルスタンダードになっていったのかを，時間観念の変化，出版資本主義の登場など，独創的な視点から分析したもので知的刺激に富んでいる。

アンダーソンは，ケンブリッジ大学で西洋古典を学んで学部を卒業した後，1958 年にコーネル大学の大学院に入り，インドネシア政治研究を始めた。1961 年から 1964 年にかけて，インドネシアの首都ジャカルタで

フィールドワークを行い，インドネシア語，ジャワ語，オランダ語も駆使して博士論文を書き上げた。それは，インドネシアの独立戦争において活躍した革命にはやる青年層，インドネシア語でいう「プムダ」（*pemuda*）に着目したもので，『革命期のジャワ』（*Java in a Time of Revolution*）というタイトルで出版された。インドネシアの独立期研究の古典である。その後，インドネシアの政治を主に文化的視点から分析する一連の研究を発表しており，その成果は『言葉と権力』（*Language and Power*）として出版された。欧米とは異なるジャワの権力概念を描いた論文などは，インドネシア政治文化研究としては屈指の出来である。

スハルト権威主義体制の屋台骨である陸軍に批判的な文章を書いたためにインドネシアに入国禁止となったアンダーソンは，タイとフィリピンの研究も始め，また，ナショナリズムの起源と流行に関する研究を進めていった。本書は，こうしたアンダーソンの知的営為の成果である。訳書は非常にわかりやすい日本語で書かれている上に，訳書の最後には，本書の理論面でわかりにくい点についての高地薫による丁寧な解説，さらには全体像の説明がある。そこで，ここでは，私が本書（あるいは，アンダーソンの研究）の特徴と思う 2 点に絞って，いくつかの章を紹介していくことにする。一つ目はタイトルにある比較であり，もう一つは変化（の兆し）への関心である。

比較する

この本のタイトルである「比較の亡霊」という言葉は，フィリピン最初のナショナリスト（といえる）ホセ・リサールが書いた小説『ノリ・メ・タンヘレ』に出てくる。主人公が西欧からスペイン植民地下のマニラに帰ってきて目にした市営植物園を西欧にある植物園と重ね合わせてしまい，マニラの植物園を当たり前のものとして見られなくなった感覚を記すために使った言葉である。

アンダーソンは，左翼ナショナリストであり第三世界のリーダーとして振る舞うスカルノがヒトラーをナショナリストとして語る演説を聞いて以来，ユダヤ人虐殺を行った極悪人としてヒトラーを捉える常識的感覚を持てなくなったという。アンダーソンは，このスカルノの演説を西欧の外交官に向けて通訳をしており，その外交官はスカルノを気が狂ったいかさま師としてしか捉えることができなかったとも書いている。おそらく，この外交官の反応が常識的なのだろう。アンダーソンの場合，比較の視座を持っていたからこそ，比較の亡霊にとらわれ，「ヒトラーの恐るべき所業を平然と眺める」スカルノの目を通してヒトラーを考えることになったのである。そうはいっても，彼はスカルノも含めて国家権力（者）に対しては痛快なまでに批判的で，本書は，そうした比較と批判が絡まり合ったものになっており，それが彼の東南アジア研究に深みを与えている。

本書の第 3 部は東南アジア各国政治社会を比較した四つの章からなる。選挙を扱った第 12 章では，シャム（タイ），フィリピン，インドネシアを比較しており，行政機構の整備が参政権拡大に先行していれば，選挙が多くの有権者を満足させる政策実現をもたらしがちだとする。タイがその例であり，フィリピンとインドネシアは逆であったためにまともな政策が実現していないのだとする。現在のタイをみてみると，国王に従順な司法や官僚機構という姿が浮かび上がってくるので，この章が雑誌に掲載された 1996 年時点では，司法も含めた国家機構が本当に有権者を満足させるように機能していたのかを再考する必要はあるが，この行政機構整備と参政権拡大の相関は重要な視点である。

ただ，アンダーソン自身は，最後のところで，結局のところ，選挙政治は広範囲にわたる民衆の政治参加を周縁化させてしまうと書いており，やはり，ラディカルな政治参加の実現を希求しているのであろう。だからこそ，次の第 13 章では，インドネシアとタイにおける（下層の）民衆の政治参加の重要な形態であるラディカリズムを比較検討している。運動とし

ての共産主義ラディカリズム終焉後にも生き続ける思想としてのラディカリズムに着目し，それを表現し続けたタイとインドネシアの作家や研究者を取り上げた。両国で異なる形で終焉を迎えた共産主義ラディカリズムに触れた後，アンダーソンは，共産主義を重要な一部とする直近の過去を見直して，可能ならば回復せねばならないという。ここで回復という時，それは運動としてのラディカリズムの復権をも意味するのだと思うが，アンダーソンは，別に具体的な道筋を描いていない。ラディカリズムもまた具体化・実態化すればするほど，矛盾に満ちてくることを知っていたからかもしれない。

変化（の兆し）を捉える？

あらゆる事象には，始まり，発展・展開，変異，終焉・終末がある。研究者によってどこに研究の力点を置くかは異なる。アンダーソンの場合，ある（変化の）始まり，いや，もっといえば，始まるかもしれない時代や事象，どうなっていくのかわからない時代や事象に一番興味を持っていたような気がする。

第 4 章と第 5 章は，ジャワ文化の文脈を存分に踏まえながら，近代化・啓蒙化という大きな社会変化の波が押し寄せる 19 世紀におけるジャワ人・文学の可能性・優雅・逸脱を描いた作品である。19 世紀末，ジャワ王宮最後の宮廷詩人ロンゴワルシトは，支配者たる王による秩序だった幸福の時代が来ることはないと悲嘆して死んでいった。20 世紀初頭にジャワ人エリート青年たちが発足させたブディ・ウトモという組織は，こうした闇の時代から光の，啓蒙の時代への以降を象徴する，そして，後のナショナリズム運動に繋がるものとして論じられてきた。それに対して，アンダーソンは，ブディ・ウトモの創始者であるストモの「自叙伝」を分析することで，ストモは新しい時代にあって，古くからのジャワの規範を見出していたことを強調し，19 世紀末から 20 世紀初頭の時代変容を闇から

光という単純化した図式で分析することを問題視している。

第 7 章と第 8 章ではタイ政治を分析したもので，それぞれ 1977 年と 1988 年に書かれた。暴力に着目し，70 年代から 80 年代のタイ政治社会の大きな変容（の始まり）を描いている。1970 年代には軍，官僚，王族，華人系ビジネスエリートを中心とする支配者層が，経済成長のもとで新たに台頭した非官僚ブルジョワ，新興ブルジョワを取り込みながら，右翼的イデオロギーを強化して農民や学生運動などの左翼勢力に対する新たな，露骨な暴力を行使していたとする。80 年代に入ると，選挙政治が確立していき，左翼勢力が弱体化した結果，新興ブルジョワが国会議員として権力を握り始めて，露骨な暴力は彼ら，あるいは，彼らの代理人の間でのみ行使されるものとなっていった。その意味で，露骨な暴力があろうとも資本主義自体はゆるがなくなったとする。

第 9 章から第 11 章はフィリピンのナショナリズムと政治を扱っている。第 11 章では，ホセ・リサールの『ノリ・メ・タンヘレ』翻訳版がはらむ体系的かつ意図的歪曲を取り上げている。1887 年に出版された初版はタガログ語も交えたスペイン語で書かれており，「社会的にラディカルで偶像破壊的で，諷刺にあふれ，ざっくばらんで，教訓的」で，メスティーソ的世界をもつフィリピン性を描いたものであった。しかし，「フィリピン国家に忠実で有能な役人として」成人生活を過ごしたゲレロが英訳した 1960 年の『ノリ・メ・タンヘレ』は，こうした原著の魅力が一掃された。アンダーソンは，原著と英訳本を徹底的に比較して，訳者が体系的かつ意図的に行った歪曲を原文の改竄と現代化など 7 点にまとめている。そのうえで，こうした歪曲が起きたのは，国家が作り上げていく公定のナショナリズムのロジックが働いたからだとし，（公定）ナショナリズムのもつ悲劇・喜劇を如実に浮かび上がらせている。

最後の第 4 部において，アンダーソンはナショナリズムの行く末について触れている。そこでは，「国」「故郷」「ネーション」を表すことばに「不

幸な」「悪運の」「呪われた」「不吉な」といった形容詞を並べる状況に慣れるすべを学ぶ必要があると述べた。また，本書の最後は，国民の政府がいかなる罪を犯そうとも，そして時々の市民がその罪にいかに加担していようとも，他ならぬ〈我が国〉がなぜ究極的に善であるのか，（このナショナリズムのもつ）善性をうまく捨て去ることができるのかと問いかけて終えている。

私の知る限り，アンダーソンはナショナリズムを常にポジティブに見ようとしてきた。そのことからすると，このナショナリズムへの問いかけは彼にとって究極の問いともいえるものであり，彼自身，その回答を示さぬまま，本書を書き終え，そして生涯を閉じた。この問いに答えることは，われわれにとって課題として残っている。

参考・関連文献

ベネディクト・R. O’G. アンダーソン．中島成久（訳）．1995.『言葉と権力―インドネシアの政治文化探求』日本エディタースクール出版部.（原著：Benedict R. O’G. Anderson. 1990. *Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia.* Ithaca and London: Cornell University Press.）

ベネディクト・アンダーソン．白石隆・白石さや（訳）．2007.『定本　想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山.（原著：Benedict Anderson. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised Version. London and New York: Verso.）

Benedict R. O’G. Anderson. 1972. *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance 1944-1946*. Ithaca and London: Cornell University Press.

❖本書の著者紹介（ベネディクト・アンダーソン）

元コーネル大学教授，専門は政治学，東南アジア地域研究。インドネシアを主な調査地としながらも，タイやフィリピンの研究も行った。東南アジアを中心としながら，世界史的な視点でナショナリズムの始まりと広がりを論じた『想像の共同体』はナショナリズム研究の古典となっている。

❖執筆者紹介（岡本正明）

京都大学東南アジア地域研究研究所教授。インドネシアを中心とした東南アジアの政治についての研究を行っている。政治と暴力の関係に関する研究を中心としてきたが，最近はデジタル化のもたらす政治社会変容に関心がある。